

2021年度のテキストです

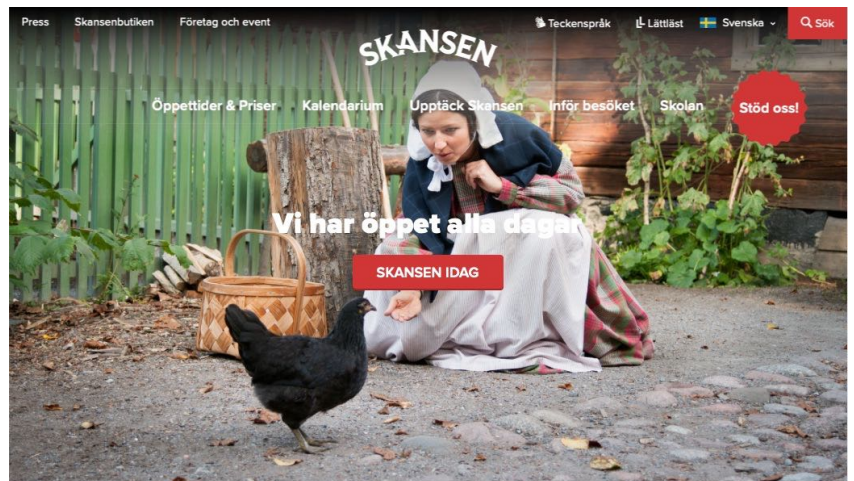
博物館展示論2021

第4講 野外博物館・ビジターセンター・エコミュージアム

1. 野外博物館 音声ファイル1 tenji2020_3-6.mp3

1) スカンセン Skansen

スウェーデンの首都ストックホルム市の中心部に近いユールゴーデン島となっていて動物園と植物園（農園）を併設する。世界初の野外博物館と呼ばれる。1800年代末に全国から農家や作業小屋を移設。当時の暮らしを再現するスタッフや家畜が園内を演出する。夏至祭など市民の祭も園内で開催している。現在も野外博物館のお手本として存在感を示す。



スカンセンの公式サイト先頭の写真。19世紀末のスウェーデンの農村の建物に加え、暮らしを再現する俳優や家畜がそこに居る

英語サイト <http://www.skansen.se/en/>

2016年に存在した公式日本語PDF

[tenji2021_4-2.pdf](#)

2) 日本の例

野外博物館はおもに建築物（住宅や宗教施設、工場やホテル、公共施設など）や産業遺産を収集保存展示する。博物館としての機能はいわゆる通常の博物館とおなじ。展示室内には入らない大型資料も保存建物内に収蔵することもある。国内では明治村、道内では北海道開拓の村、博物館網走監獄など。



明治村（愛知県）は貸衣装もあり自撮りの名所にもなっている

3) 特徴

歴史を題材にしたテーマパークでもある。野外展示であるが、博物館の定まった敷地で完結する。

2. ビジターセンターと自然系施設：自然公園などの来訪者施設

1) 日本の国立公園ビジターセンター

国立公園のビジターセンターは野外博物館と異なり完結した目的地ではない。国立公園を歩き楽しむための案内施設である。よって展示内容は国立公園の自然情報や探索への導きであり、来訪者向けの散策用ガイド冊子や地図（＝セルフガイド）を配布販売する。来館者がそこから屋外の園路や自然散策に出掛けて目的が達成される。「エコミュージアムセンター」の名称も見られるが違いはない。なお、国立公園エコミュージアムセンターは後述するエコミュージアム（地域まるごと博物館）とは別物。

阿寒湖畔エコミュージアムセンター <http://business4.plala.or.jp/akan-eco/index.html>

国立公園で環境省の施設であるが、建築工事は環境省、展示工事は地元自治体のこともある、運営は地元民間団体という構図が一般的。博物館と異なり、運営の自主性は無いが少なく、役割は国立公園の管理計画のうちに含まれる。それでも自主的運営を進め、小中学校の総合学習の受け皿までおこなう例外的施設も存在する。

総合学習対応 | 阿寒摩周国立公園川湯エコミュージアムセンター

<https://www.kawayu-eco-museum.com>

2) 自然系施設

「自然系施設」の名称は日本野鳥の会の用語である。近隣では濤沸湖水鳥・湿地センターが該当する。このような景勝地の案内施設について環境省は野生生物等体験施設と呼んでいる <http://www.env.go.jp/nature/yasei/guide/index.html>

濤沸湖水鳥・湿地センター https://www.city.abashiri.hokkaido.jp/230boen_kankyou/tofutsu-ko/

自然系施設の例を環境省の区分で示すと下のようになる。

野生生物保護センター（種の保存法により指定された国内希少野生動植物種の保護増殖・調査研究）

水鳥・湿地センター（ラムサール条約登録を設置根拠にした湿地のビジターセンター）

野生鳥獣保護センター（鳥獣保護法を設置根拠にした監視員の休憩施設の拡大）

世界遺産センター（世界遺産条約を設置根拠にした登録地のビジターセンター）

なお、自然系施設のなかには学芸員を置くケースもある。残念ながら国立公園ビジターセンターやエコミュージアムに学芸員はいないが、将来の職場の開拓先になるかも知れない。

自然系施設には展示はあるが資料の収集保存は目的外。とりわけ保存の施設や設備は無いことが多い。ただし例外もあり、自治体設置の博物館が閉館したときの代替施設として展示を兼ねた収蔵機能を持つことがある。下の例

ひがし大雪自然館 <http://www.ht-shizenkan.com/contents/exhibit/>

この施設は国立公園ビジターセンターである「ぬかびら源泉郷ビジターセンター」と2012年に老朽化を理由に閉館した上士幌町が設置した「ひがし大雪博物館」（1970年開館）の後継施設の「ひがし大雪博物資料館」との複合施設。閉館した博物館の収蔵資料はいくつかの博物館に分散収蔵されたが、一部がここに展示されている



阿寒湖畔エコミュージアムセンターの展示。右のホワイトボードは日替わり自然情報でさらに側にもある。奥の展示室は空中写真や剥製など



知床世界遺産センターの展示は概説的。国立公園の自然に誘い出す内容にはなっていない

3. エコミュージアム

1) エコミュージアムとは

ミュージアムとはフランスの田舎で始まった生活動態保存活動を祖とし、リビエール Georges Henri Rivière

らによって1971年に écomusée [エコミュゼ、フランス語] として博物館業界に紹介された。旧来の博物館が至宝の展示が目的とすれば、エコミュゼは日常の暮らしを文化遺産と考える新たな解釈といえる。とはいえ博物館の思想の元に進められ、保存が第1目的である。下の資料はフランス北東部のアルザスの公式英文解説と日本語での現場報告。この2つは元の考えを正しく伝える。なお、「エコ」は地球にやさしい、環境保全主義のエコロジーとは異なり本来の意味での生態学あるいは家の意味である。

形式的に見れば、地域の保存資料のビジターセンターとなる「コア施設」が1か所あり、地域内に保存資料である「サテライト」が複数存在、その間を交通機関や遊歩道などの移動経路が結んでいる。

公式サイト「沿革」英語版 The history of the Écomusée d'Alsace, from the past to the present

<https://www.ecomusee.alsace/en/exploring-the-ecomusee/history-of-the-museum>

1971年に学生グループにより建物の保存活動が始まり、現地での保存はできなかったが1980年に移築復元が実現、1984年から一般公開に至ったとある。

公式サイト「紹介」 Presentation - Écomusée d'Alsace

<https://www.ecomusee.alsace/en/exploring-the-ecomusee/presentation>

エコミュージアムとは、リビエールを引いて、住民と地域の文化遺産を保存する活動という意味で学校であり、住民が自らを映し出す鏡であり、未来への見方を与えてくれるものだとする

エコミュゼ・アルザスは、20世紀初頭のアルザス村の暮らしを見せる野外博物館 **1850過ぎまで休憩**
 フランス北東部アルザス地方のエコミュゼの報告 Écomusée d'Alsace [tenji2021_4-3.pdf](#)

(株) リクシル LIXIL の情報誌「ネルシス」Vol.6, 2005 <http://www.nelsis.jp/nelsis/vol6/p40.htm>



アルザスエコミュゼ公式ページの写真。建物に加えて周囲の環境を取り入れている

2) 地域まるごと博物館

文部科学省の資料「エコミュージアムについて」は法政大学の馬場憲一氏（現名誉教授）の資料をもとに作成されたもの（「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」第5回配付資料 2007年1月）。この資料をはじめ国内最初の事例として山形県朝日町（あさひまち）が紹介される。が、朝日町の例は古い暮らしの動態保存ではなく名所を線で結んだ観光経路の提案。これが「地域まるごと博物館」の正体といえる。命名者は知らない。



上写真：朝日町のエコミュージアムは町の区域全体にある名所をつないだ「地域まるごと博物館」

「地域まるごと博物館」の名前と手法は低予算で実現可能な「地域おこし」として地方の行政が着目している。しかし、エコミュゼの本来目的である建築や生活様式の保存活動は薄れている。

文部科学省「エコミュージアムについて

*和人 アイヌに対して本州からの出稼ぎ者や移民を指している言葉

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/07082703/002.htm

あさひまちエコミュージアム | 山形県朝日町見学情報データベース <http://asahi-ecom.jp>

イギリス アイアンブリッジ溪谷

産業革命を実現した資源セットが揃い、その成果物である1779年（=江戸時代、網走に和人*の漁場が開かれる以前）に完成した世界最初の鉄製橋梁を現地保存している。



世界初の鉄製橋梁が現地保存されるアイアンブリッジ溪谷博物館

アイアンブリッジ溪谷博物館

公式サイト <https://www.ironbridge.org.uk>

日本伝熱学会の学会誌記事 <http://wattandedison.com/ib.pdf>

まとまった報告で写真も豊富です [tenji2021_4-4.pdf](#)

4) フットパス

下：フットパスが示された地形図。凡例 [はんれい] には権利の文字がある

イギリス発祥の土地の囲い込みに対抗して生まれた「通行の自由」を求める抵抗運動の成果品。日本でも2000年代初めから北海道を中心に農地や平地林の周遊路として注目されるようになった。しかし、権利の主張とその成果物という点については強調されない。イギリスでは政府公式ページに「Rights of way and accessing land」（通行と土地の利用の権利）と明示され、政府機関発行の地形図にも描かれている。なおフットパスは博物館ではなく、保存すべき対象は持たない。

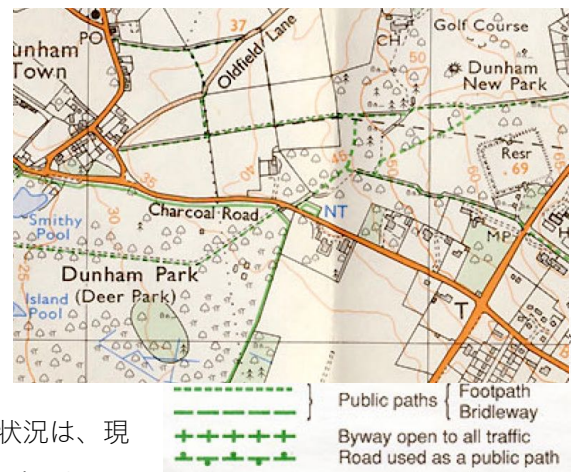
農地内の歩道 footpath や乗馬道 bridleway

イギリス政府の説明 <https://www.gov.uk/right-of-way-open-access-land>

日本フットパス協会の説明 <https://www.japan-footpath.jp>

伸びゆく北海道のフットパス

https://www.hkk.or.jp/kouhou/file/no582_report-2.pdf



【博物館展示論2021レポート1】

網走地域のエコミュージアム企画書を作る。本来のエコミュゼ

が望ましいが、「地域まるごと博物館」でもよい。交通や市街地の状況は、現状のまま、あるいは軽微な改変で可能なことが条件（委細相談）。1）計画の

概要（名称と概要説明100-200字）、2）コア施設（名称と機能80-150字）、3）サテライト施設と役割（施設の名称と機能合計で100-200字）、4）想定する交通手段（80-150字）、5）概念図（概念地図、コア施設、サテライト施設、交通手段が図示かつ名称が記載されていること、色数自由）を記載する。

様式：A4片面、1-4）はワープロ、5）の図はコンピュータまたは手書き可とするが物理的な貼り付けは不可。

表面最上段に学科・学籍番号・氏名を記すこと。フォントサイズは10ptを標準とする（9-11pt）、色数は自由。【紙で提出】提出期限：11月9日（火）正午、授業時間または博物館情報学研究室（不在の場合はレポート入れに、遅れても提出すれば評価対象）

学科：

学籍番号：

氏名：

博物館展示論レポート1 提出イメージ

1) 計画の概要

ヤマドリのたまごはどんどこのどん。これなかにきびを体験し、はまぐりごもんを開く。やまねのしっぽははりもぐら。

2) コア施設

どこでもかまわんが、実在すること

3) サテライト施設（施設名と役割を書く）

はくぶつかんでもよい こんなことをする

商店も可能 あんなことまで見る

岬や河畔などもOK どうしても行きたい

景色のよい線路や道路など移動路線もおもしろい 頭上注意

寺社公共施設もよい その意味を記す

農場漁場 実現可能な見学や体験の方法をちゃんと考える

4) 想定する交通手段

JR、路線バス、（乗り合い）タクシー、レンタカー、自転車（レンタサイクル）、徒歩、その組み合わせ。バス路線の新設、貸し自転車のシステムなどは想定内、道路鉄道の新設は不可

5) 概念図

本当の概念図でも

地理的な図でも

どちらでもよいです

